

思い描く未来に向かって

校長 村井 浩昭

ウイズコロナの三年間は生活面に多大な変化をもたらした。「新しい生活様式」と称され、密閉・密接・密集い
わゆる三密回避を基本として、人と会えない、呼べない、集まらない状態が続いた。五類に引き下げられると待
ってましたといわんばかりに今までできなかったことが復活した。本校でも、講師に来校していただき、体育館
で対面での講演をしていただくことができた。客人を女関であしらうことなくゆつくりと話をすることができた。
体育祭や文化祭では多くの方々に来ていただき生徒の様子を見ていただくこともできた。

今年度は、多くの方と出会い、語り合うことができた。直接話をする、その人の背負っている人生や考え方
を感じとることができる。講演のとき、打ち合わせや講演後に個人的に話を聞かせていただくことがある。日頃
関わり合うことが少ない分野の内容は興味深い。特に印象深かったのは、十一月三日の文化祭で行われた防災講
演会と十一月二十四日に行われた人権・同和教育講演会の講師の方の生き様である。前者の講師は細川幸英さん
という本校卒業生である。もともと松山市職員であったが、防災関係に携わっており、退職後は東日本大震災後
の復興に尽力したいという思いから、宮城県気仙沼市で水道施設整備などに従事した。そのあと福島県の任期付
き職員採用試験を受け、現在は福島県大熊町で原発事故後の復興活動に尽力している。「防災は挑戦なんです。」
と笑顔で生き生きと語ってくださった。「災害が起こる前に、起こった後の街づくりについて考える必要があるの
です。災害前であれば計画的に作りたい街を描いておくことができる。」と災害の後動いたのでは遅いということ
を力説された。趣味としても俳句を詠みながら奥の細道を歩く旅にでかけたり、城川町に十年かけて山小屋を建
設したりと人生を謳歌されている。後者の講師は高山良二さんという三間町出身の元自衛官である。自衛隊時代
に国連平和維持活動（PKO）でカンボジアに派遣され地雷処理に従事された。目の前で不発弾や地雷が爆発し
瞬間に命が削られた様子を目の当たりにしている。退官後、再びカンボジアで地雷処理活動を継続していると
いうのだ。その様子は二〇一九年に「奇跡体験！アンビリバボー」でも放送されている。「先日フランスに行っ
て・・・」と言われたのでつきり平和維持活動についてかと思っていると、お酒の品評会にカンボジアで醸造
した焼酎を出品したら金賞をいただいたという内容だった。詳しく聞いてみるとまったく酒造の知識のないこ
ろから始めて、ジャスミンやマンゴーなど現地の農産物を原料に使った酒造会社を設立したというのだ。「地雷除
去したあとの土地活用が大切なんです。現地の方が豊かに暮らすための産業を興し、経済を活性化させなければ

ならない。それも地雷処理活動です。」次の五月にはIWSCコンクールというイギリスで行われる世界最高峰のお酒の品質を競う競技会にも出品するらしい。お二人に共通することは、退職した後、現職時代に培ったノウハウを基にしてずっと未来に向けて走り続けていることだ。家族を愛媛に残して取り組んでいることも共通している。積み重ねた経験が次の未来の姿を創造し続けている。自分の人生をこんな風に描きたい、あんなことをするとこんな良い結果が生まれるだろうなど、考え抜いたことを行動に移し、それをきちんとした形にしている。そして何よりも楽しみながら携わっているのだ。

社会の姿は、誰かがそうありたいと望んだから具現化され今に至っていると思っている。いつの時代か、だれかがどこかで、こんな生活を夢見ていたから今こういう現実があるはずだ。ふと、自分自身が子どもの時代、社会はどんな未来を想像し、夢見ていたのだろうかと思いついてみた。確か小学校の図書館で、21世紀の未来予想を描いた本を借りて読んだ記憶がある。ネット検索でこれだったのではという本を見つけた。表紙のイラストに見覚えがあったからだ。全20巻「おはなしノンフィクションシリーズ」第19巻「21世紀ものがたり」である。アマゾンでは、古書として三万円の値を付けて売られていた。車が空中を飛び、宇宙と行き来でき、何もかもが自動化されている世界、いわば予言のような内容だった。実際、車の自動運転が進み、機器の遠隔操作は当たり前になっている。一般人で宇宙旅行に行く人も出現し、大きく異なった未来ではないし、昔描いた姿を現実が追いかけているようにも思える。検索をかけているときに「昭和ちびっこ未来画報」という一九五〇年代から七〇年代にかけて子ども向けメディアに掲載された未来を予想したイラストを集めた文庫本を見つけ、こちらは手に入れた。その中の「コンピュータ」という章に「コンピュータ学校出現!!」という一九六九年のイラストがあった。スクリーンに先生が映り、机上に一台ずつコンピュータが置いてあり、生徒が操作している。説明文には「スクリーンの中から先生が出す問題を机の上のコンピュータで答える。・・・中略・・・コンピュータはノートと同じように使えるのだ。」とある。ウィズコロナでICT活用が一般的になり、教育用クラウドやアプリ、リモートオンライン会議の導入が一気に進み、一人一台端末の活用が当たり前になっているすでに実現された世界ではないか。半世紀以上に未来はこんな風になると予想した世界が今ここにある。

卒業生の皆さんの思い描く未来はどんな世界だろうか。制約の多い時期を乗り越えて今がある。幸せな未来を思い描いてほしい。自分の未来はこんな風になるんだ、こんな風にしたのだと思えば実現することはできない。私もまだまだ自分の未来を思い描きたい。あなたたちそれぞれが思い描く未来に向けて、進み始めよう。素晴らしい未来を思い行動すれば、現実がそれに近付いていく。